

令和3年度穎明館高等学校卒業式式辞

穎明館第35期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、心より、お祝い申し上げます。

本日は、学園本部から理事長の堀越正道先生、副理事長の堀越由美子先生を迎え、またご列席の保護者・教職員・代表生徒の皆様とともに、卒業式を挙行できることを誠にうれしく思います。

卒業生の皆さん、皆さんは穎明館での学校生活6年間、実によく頑張りました。とくに新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた高校2年、3年は我慢の時でしたが、本当によく乗り越えたと思います。思えば、高校2年は全国一斉休校からのスタートでした。オンラインでつながったものの、不安を抱えた人もいたことでしょう。私たち教職員も手探りでした。先行きの見通しが立たない中で、一度中止になった文化祭、体育祭を35期生の皆さんが中心になって復活・開催させたことは忘れられません。「可能性を信じてあきらめてはいけない。学校は希望の場所でなくてはいけない」——私も皆さんから学びました。ありがとう。そしてコロナ禍が続く中で高校3年生に進級し、受験勉強にもよく励みました。高校棟3階の教室で見かける皆さんの真剣に学ぶ姿に、私は元気をもらっていました。もう一度伝えたい。ありがとう。

今日は人生の節目の日です。皆さんも今日までを振り返り、保護者・教職員はじめ、お世話になった方々への感謝の気持ちをしっかりと表してください。

さて、今日は皆さんに卒業のはなむけとして、コロナ禍にあって、あるいは今までの人生において、私が心がけてきたことを伝えたいと思います。

それは「ユーモアを忘れない」ということです。

ユーモアの語源については、**Human**が変化したものとも言われています。**Humanism**の表現としてのユーモアには、人間の生活の中ににじみ出る矛盾やおかしさを寛大な態度で笑い飛ばしてしまうような面があります。

ドイツのことわざに、

Humor ist, wenn man trotzdem lacht. (ユーモアとはにもかかわらず笑うこと)

があります。

「にもかかわらず笑う」——張り詰めた雰囲気の中では、本当は「笑う」などは不謹慎なのかもしれません。コロナ禍にあったこの2年間は、そのような張り詰めた時間だったのでしょうか。それでも困難な時こそ、ユーモアで温かく楽しい気持ちにできればと、私は常に考えてきました。ユーモアは愛情と思いやりの表現だとも言われます。楽しく幸せに生きるためにユーモアを忘れない、皆が不安にしている時には笑顔で安心させたい、「にもかかわらず笑うこと」を心がけてきました。

20世紀を代表する喜劇王、チャールズ・チャップリンもこう言っています。

A day without laughter is a day wasted. (無駄な一日。それは笑いのない一日である)

ユーモアについて、もう一つだけ紹介しておきます。それは『夜と霧』からです。『夜と霧』の原題は、「強制収容所におけるある心理学者の体験」です。オーストリア・ウィーン在住の精神科医であったヴィクトール・エミール・フランクルが、ただ「ユダヤ人である」というだけの理由でナチスにとらえられ、過酷な強制収容所生活を余儀なくされた経験をつづったものです。冗談などとても考えられないような状況下で、魂を振り絞るようにして滑稽な話を考えた様子を、次のように描写しています。

収容所生活を知らない外部の者にとっては、強制収容所の中に自然を愛する生活あるいは芸術を愛する生活があるというがごときは、それだけですでに驚嘆すべきことのように思われるであろうが、しかしもし収容所にはユーモアもあったと言ったならばもっと驚くであろう。もちろんそれはユーモアの芽のごときものに過ぎず、また数秒あるいは数分間だけのものであった。ユーモアもまた自己維持のための闘いにおける心の武器である。周知のようにユーモアは通常の人間の生活におけるのと同じに、たとえ既述の如く数秒でも距離をとり、環境の上に自らを置くのに役立つのである。

私は数週間も工事場で私と一緒に働いていた一人の同僚の友人を、少しずつユーモアを言うように教え込んだ。すなわち私は彼に提案して、これからは少なくとも一日に一つ愉快的話をみつけることをお互いの義務にしようではないかと言った。

卒業生の皆さん、どう思われますか。極限状況の中でどういう人が生き残るのかというのは、20世紀の大きなテーマの一つでした。このような描写を読むと、私にはユーモアとか、デリケートな感受性とか、そういうものが意外に人間の生命力を支えていくのだということを実感させられます。

改めてコロナの経験をふまえてみても、人生というものは悲しみや辛いこと、不条理や納得のいかないことに満ちているようにも思います。卒業生の皆さん、今後の人生でたとえ絶望することに直面しても、ユーモアや笑顔を通じて、思いがけない人の優しさに触れる瞬間はきっとあるはずです。そのような瞬間、時間を大切にしてください。「ユーモアを忘れない」——そこで得た幸せを胸に、愛を持って人に接するようにこれからの人生を生きていってほしいと思います。

さて、式辞の結びは創立者堀越克明先生作詞の穎明館校歌です。この2年間、今日もそうでしたが、校歌は演奏、心の中で歌うことを続けてきました。穎明館の校歌については、創立者堀越克明先生が作詞をして、昭和を代表する音楽家の藤山一郎先生に、「アップテンポにしたら応援歌になるようにも作曲してほしい」とお願いしたそうです。藤山先生は創立者の熱い思いを受けとめて、校舎ができる前のこの館ヶ丘の地を2度も訪れ、作曲されたと聞いています。今日は皆さんの人生の応援歌になるように願い、歌詞をかみしめながら、少しアップテンポに独唱します。受験激励の際には「合格宣言」を歌いました。「歌う校長」というのも、私なりの真面目なユーモアの表現の一つです。受けとめてもらえれば幸いです。そして皆さんには、コロナが収まった35期生の同窓会で、ぜひ肩を組んで、母校の校歌を人生の応援歌として高らかに歌ってほしい。2年間、歌えなかった分の気持ちも込めて。

これから大学という新たなステージで知性を磨いていく、卒業生の皆さんに、穎明館における最後の激励のメッセージとして贈ります。

穎明館校歌

みどり豊かな 多摩の陵 歴史に刻む 聖地 美し
いま われら 希望に燃えて 真理の道を 求めて励む
清新の気につつまれて 伸びゆく健児 理想は高し
穎明館こそ わが誇り

若さみなぎる 四季の校庭 明るく伸びる 力逞し
いま われら 情熱こめて 体を鍛え 英知を磨く
栄光の日をめざしつつ 伸びゆく健児 輝く未来
穎明館こそ わが誇り

誇り高き穎明館 35 期生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんの人生に幸多かれ。

以上、令和 3 年度穎明館高等学校卒業式式辞といたします。